

学校通信

強い網

2016年12月/2017年1月号

新版 第83号

編集

駿台甲府高等学校

駿台甲府中学校

駿台甲府小学校

「風」と「伝統」

指導監 石川 博

◎ディランとはつぴいえんど

村上春樹が「風の歌を聴け」でデビューし話題となったのは、私が大学生の時だった。「風の歌」っていえば、ボブ・ディランの「風に吹かれて」か、「はつぴいえんど」の「風をあつめて」だろう、と見当をつけたのだが、実際に読んでみると、そのどちらかを具体的にイメージさせるものではなかった。しかし、時代の雰囲気を表す語として「風の歌」というフレーズは強く印象に残っている。もうすぐ四十年になるが、ディランのノーベル賞受賞を機に、再びこれらの曲を聴き、いいようなない懐かしさにしばし浸った。

ディランの方は、わかりやすい反戦曲であると同時に、難解な哲学的思索でもある。「はつぴいえんど」の方は、おしやれなフレーズを散りばめながら都会の憂鬱をスケッチする^{(*)1}のと同じに、ディランの思索への解答であると感じた。つまり、「答えは、風が知っているだけだ」とときはなした風情のディランに対して、「風を集めて(自分が)青空を翔ける」ことで、答えを出

すというとても前向きな歌詞に思えたのである。言うまでもなく「風」は「現在」を象徴する。村上春樹を含め、三者とも二十代の作品であることに、改めて当時の若者の勢いを感じている。

◎平成は終わり、時代は変わる

年が明け、今上天皇の退位が具体的に議論されるようになってきた。年号も変わる。今想定されているスケジュールによれば、平成は三十年までとなりそうだ。そこに特別な感慨はないが、自分自身と重ね合わせると、三十一歳と六十一歳で改元に遭遇することになり、教員生活の大半が平成と重なることに気付く。

個人史はともかく、駿台甲府にとっても、草創期こそ昭和だったのが、その発展は平成とともにあった。そして塩部への中学移転という節目が、改元にほぼ重なる。昭和期から教壇に立つ教員も次々と辞める年齢に達し、間もなく草創期を知る教員はいなくなる。まさに「時代は変わる」のである。

人は変わっていても、学園に受け継がれていくものがある。それを「伝統」というのだろう。「風」の対義語と言ってもいい。

一般的に、伝統校と呼ばれるのにはどれくらいの年月が必要だろうか。親

子二代同じ学校で学ぶというあたりが、一つの判断基準ではないだろうか。個人によって差はあるが、親子が同じ学齢となるのには、普通、二十数年以上かかる。駿台甲府もようやく伝統校と呼ばれる「年齢」になってきた。実際に親子二代をお教えることもある。もちろん年月だけで「伝統校」になれるわけではない。組織の中で受け継がれる慣習があり、先輩から後輩へと橋渡しされる校風があり、それらが世間に認められて「伝統校」となる。卒業生のネットワークも必要な要素だろう。あの学校は伝統があるから安心だね、と地域の方々が認識してくださることで、学校は安定していく。そして本校は、地域から「進学校」という評価を得ている。願わくば、それに加えて、生徒の主体性を尊重する愛情教育の学校と認識されたいと思っている。

◎チャレンジすること

一方「伝統校」という言葉の響きには、古めかしいとか、面倒そうとか、発展性に欠けるというようなマイナスイメージもある。チャレンジング・スピリッツを標榜する本校にとって「伝統校」という看板は必要ないのかもしれない。チャレンジすることは、「転がる石のように」変化し続けること、さらには多様性を目指すことだから。いわば、先ほどの、「安心だね」と両刃の剣で、「飛躍する可能性は低いね」と思われたら、本校の存在意義は薄くなってしまうのだ。

現在少子化の影響もあり、公立高校の統廃合や、課程の再編なども進む。

それは伝統の維持より変革に目が向くことだ。まして公立高校では教員が移動していく。特徴的な行事などは受け継がれても、精神的な面での「伝統」は育ちにくい。その点、駿台甲府をはじめとする私立の学校は、建学の理念があり、それに沿って教職員が採用され、長年同じ学校に務めるのであるから、否応なく「伝統」を作っていくことになる。

そうして、ひとりひとりを大事にし、チャレンジング・スピリッツによる飛躍を目指すという伝統が育ち、浸透していくのだろう。チャレンジすることは失敗の可能性が高い、ということでもある。成功することだけを目的としたのでは、大きな飛躍はない。失敗しても「よくよするなよ」^{(*)2}の精神で次に向かう。「成功」の反対は「失敗」ではなく、「チャレンジしないこと」だから。「風が知っているだけ」と流さず、「風を集めて」飛んでみよう。

保護者の皆様も、生徒諸君も、チャレンジする意識を持つことが、より充実した学校生活にむすびつくのだと、もう一度認識していただきたい。さらにはチャレンジしてこそ、様々な桎梏から「解放されるべき人生」^{(*)3}が迎えられると思うのである。

「で 囲んだフレーズはいずれもディランの曲名。ただし「風をあつめて」は松本隆作詞・細野晴臣作曲の楽曲」
 「(1)「起きぬけの路面電車」とか「摩天楼の衣擦れ」といった一節。

(*)2 Don't think twice, it's all right
 (*)3 I shall be released

フードドライブ

高校 E S S 顧問 堀江 健太郎

二〇一六年十二月十四日から二十一日にかけて、本校でフードドライブが実施されました。多くの生徒達や保護者の方々、そして教職員の方々にご協力頂きました。ご協力、本当にありがとうございました。ご提供いただいた食品は十二月二十一日にフードバンク山梨にフードドライブ実行委員が責任を持ってお届けいたしました。そしてこれらの食品はすでに、山梨県内の五〇〇世帯、約一〇〇〇人の子供に配られています。

この場を借りて、この企画が実施されるにいたった経緯と活動結果のご報告をさせていただきます。実は、この企画の発案・運営は全て生徒主体で行われました。フードドライブ実行委員会を立ち上げ、中心的に活動したのは二年生の中国有貴さんです。中国さんは、私が顧問を務めるESS部に所属しています。彼女は英語スピーチ大会への出場を考え、ブレインストーミングしていくつかの社会的な問題を探し出しました。そしてその中から、実際に自分で何かアクションを起こしてみようと思う問題として『子供の貧困』を選んだのです。

まず、夏休みにフードバンク山梨に自分で電話をしてボランティアに参加し、それを踏まえて大会で英語でスピーチを行いました。そして自らの主体的な活動の仕上げとして今回のフードドライブの実施にまでたどり着きました。

た。顧問の私としても今回の一連のアクティブな学びを生徒と共にできたことをうれしく思いますし、彼女を誇りに思います。今後も様々な形で生徒の主体性を引き出す教育を心がけたいと思います。改めて、皆様のご協力ありがとうございました。



フードドライブ実行委員と八田校長
(一番右が中国有希さん)

【活動報告】

食品提供者数 174人 (のべ人数)

パスタ 1箱

調味料 3箱

缶詰 2箱

お菓子 6箱

のり(お茶漬け、ふりかけ) 2箱

レトルト 1箱

カップ 1箱

乾麺 1箱

インスタント麺 4箱

お茶(紅茶、コーヒーなど) 3箱

ジュース 5箱

その他 2箱

賞味期限が平成二十九年以降の食品 5箱

合計 36箱

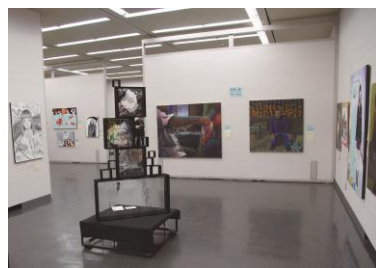
※ダンボール箱(約50×40×35)単位で数えています。(他に金券の寄付あり)

美術デザイン科展

美術デザイン科 四條 朋恵

昨年の十二月二十四日、二十五日、そして一月二日から五日にかけて第三十二回美術デザイン科展を開催しました。一年間、生徒たちが課題で制作した作品や時間をかけて制作した公募作品、美学科展のためだけに制作したコンクール作品などを展示しました。今年は公募展に多くの作品を出品したり、コンクール作品にも力を入れたりして、大きな作品が数多く並ぶこととなりました。工夫を凝らした平面や立体作品、およそ千点を展示することができました。

年末年始のお忙しい中、PTA役員を中心に保護者の方々に搬入搬出にご協力いただきまして、誠にありがとうございました。



幾つかの新聞やNHKのイベント案内に展覧会の案内が掲載されたほか、山日新聞や甲府CA TVに取材もいただきました。その放送を聞かれた方や多くの保護者や卒業生にご来場いただき、大盛況で終えることができました。

今回の来場者数は、受付のカウンターで九百五十三人、投票者数は八百四十五人で投票総数は四千四百五十票となりました。来場者からは「若い人たちの溢れるエネルギーに元気をもらいました」、「自分の内

面や思春期の複雑な心情が出ていた」、「学年が上がるにつれて成長がうかがえた。」と言った多くの感想をいただきました。

会場で行いましたコンクールにつきましては、各学年上位を大賞者と準大賞者として表彰します。一年生は矢田部遥さん、二年生は進藤穂野香さん、三年生は奥山海聖さんが大賞に選ばれました。詳しくはホームページに掲載いたしますのでご覧下さい。表彰は予選会の時に行い、PTAから賞品を贈呈されます。

現在、美術デザイン科展で展示した作品をまとめた『美学科創作集』の制作も行っております。発行は卒業式になりますのでお待ちください。

毎年行っている美術デザイン科展を無事終えることができたのも、日頃から学校の教育活動にご協力を頂いている保護者の皆様や多くの方々の支えがあったことです。今後も美術デザイン科職員一同、生徒がより充実した高校生活を送れるよう、生徒とともに努力していきたいと思っておりますので、変わらぬご支援の程よろしくお願いたします。



山梨県高校芸術文化祭優秀賞(県代表) 2年 坂本美果
「いきものがかり」 1.167×1.167mm 油彩

強く優しい人になりたい

穂山 ひかる (駿台府中2年)



「シロロ」と「キロロ」、私がこの夏に出合った絵本に出てくる双子の鳥たちの名だ。色鮮やかな太陽と少しとぼけた表情の動物が描かれた表紙にひかれて手に取ったのだが、読んでいくと、相手思いやり、必死で努力する双子の鳥の姿に涙が出てきた。また登場する熊やカモシカもみな優しく思いやりにあふれていた。こんなに温かいお話を書いた「こばやしあきひろ」さんとは、どんな人だろうと思っていたところ、この記事が目にとまった。

小林さんは駿台甲府高校出身。私の学校の先輩だ。大学で人工知能のプログラミングを学んだ後、就職しキャリアを積んでいた二十七歳の時に、突然足裏に痛みを感じるようになった。最初は原因が分からず、いくつもの病院で検査を繰り返して、やっと病名がわかったときには、神経系の難病で、治療法がないことを宣告された。病気が進行すれば、待っているのは死。症状の進行を止める唯一の方法として、オーストリアで脳死肝移植を受け、現在も病氣と闘いながら執筆活動をしている。

記事で紹介されていた自分自身の経験をまとめた「つらいときに読む本」というのを図書館で借りて読んでみた。病名宣告は、同時に余命宣告のようで大変だったと思う。入院中知り合いになった人達の死も経験し、「死」が、私たちよりずっと身近だったにもかかわらず、本から知ることのできる小林さんは、とても前向きなのだ。常に明るく、物事をよい方向に考えている。そして、周囲の人に感謝することを忘れていない。また、自分を苦しめている病氣についても、足が動かないことを悔やむのではなく、今の自分に何ができるかを考えている。そしてその中で新たに夢として「書くこと」を見つけたのだ。そして、小林さんの書く本は、すべて優しく温かく、人を励ます内容ばかりだ。読んで涙も出るけれど、勇気もたくさんもらう。そんな小林さんだからこそ、周囲にも大勢支えてくれる人がいるのだと思う。改めて、『ふたごの鳥』を読んでみた。

「シロロ」は「キロロ」を救うために、翼に大けがをしてしまった。でも努力家の「シロロ」は動く右側の羽を鍛えてもう一度、飛ぼうとする。一方、先を読む力のある「キロロ」は、「シロロ」が努力し、片方の羽を鍛えることを予想し、自分も左側の羽を強く大きく鍛えた。そして、二羽がまるで一羽の鳥のようになって大空を自由にはばたいていくのだ。

小林さんを知ってから読むと、この絵本から違うメッセージも受け取れる。けがや病氣で苦しむ人に、あきらめないことの大切さや勇気を与えるだけでなく、人はたくさんの人に支えられて生きていくということも伝えられている。「人は決して一人ではない。たくさんの人に支えられて生きていくのだ。」この言葉はよく聞かすが、私は、あまりこの言葉の重みを実感できなかった。しかし、本当につらく苦しい時に支えてくれる人の存在があると、人は頑張れる。一人ぼっちでさびしいと思つたときに、周囲を見まわせば、優しい言葉、温かい手をさしのべてくれる人の存在に気づくことができる。目を閉じて心を閉ざしてしまつたら何も見えないし、気づかないのだ。

私は今、とてもたくさんの人に支えられて生きていく。両親、姉、友達、先生。私のまわりには優しく温かい人たちのおかげで、つらく苦しかったことも一つの思い出になり、笑って話すことができるようになる。また、難しい勉強や大変な練習など、途中で投げ出してしまいたくなるようなことも、自分一人だけではないと思うと乗り越えられる。私もこれからは、支えてもらうだけでなく、誰かのために何かができる強くて優しい人になりたい。それが、小林さんが、この絵本に込めた「努力と友情を伝えたい」というメッセージを受け取った証になるのだと思う。

★第13回小中学生新聞感想文コンクール
(山梨日日新聞主催) 優秀賞作を転記。

プログラミング授業

小学校 山下 潤

十二月七・八日の二日間、小学校で初めてとなるプログラミング授業を行いました。プログラミングは文部科学省が四年後に小学校課程において必修化を検討をしている内容であり、今回は東京御茶ノ水にある駿台電子情報&ビジネス専門学校から講師をお招きし、全面協力のもと実施しました。

授業はプログラミングについての講義、ロボット組立作業、プログラミング・動作確認の行程に分けて行われました。最初の講義の中ではプログラミングとはコンピュータとのコミュニケーションであり、きっかけと動作について順番を考えながら命令することの大切さを日常生活に置き換えて考えました。

次に、プログラミングで動く車型ロボット組立作業を行いました。電波を受け取る基盤や超音波センサーなどを本体に取り付けながら、ロボットの仕組みについて学びました。特に細かな基盤をネジで取り付ける作業など協力して確認しながら行いました。その後、iPadにダウンロードしたMakeblockという専用アプリを使ってプログラミングを行いました。プログラムは命令文を書くのではなく、ブロック型のオブジェクトを視覚的に配置していくビジュアルプログラミング形式が採用されており、小学生などの初心者でも比較的簡単に記述できるようになっています。パズル感覚で楽しみながら行いました。講師からは、十字キーを画面に出し、それぞれの方向に走ることと、超

音波センサーが一定の距離に障害物を感知したら右に曲がって避けて走る、という二つの課題が出されました。まずはボタンが押されたら前に走る、ボタンを離したら止まるという基本的なプログラムの書き方を教わると、ほとんどのグループで右、左や後ろなどは説明なしで記述することが出来ました。プログラミングを書き終えると、正しく動作するかプログラムをロボットに送信し確認しました。中には前に進むはずが後ろに進み、どうして後ろに進んでしまったのか確認するグループもありました。接続が間違っていたのか、それともプログラムが違っていたのか、修正を繰り返して、正しく動作するまで原因を探りました。解決できた時は歓声を上げて喜んでいました。最後はモーターの回転数を変えて競走したり、サッカーや相撲を行ったりする中で、機械やプログラムは苦手だと思いついていた児童も楽しい印象を持って終える事が出来たようです。

授業の様子はテレビや新聞でも報道されるなど、世間でも高い関心を持たれています。今後もプログラミングなどの新しい分野を取り入れ、様々な活動を展開し、子どもたちの興味関心や個性を伸ばしていけるよう駿台グループと連携して行きたいと思えます。



文部科学大臣賞ダブル受賞

大人でさえ新聞離れが加速している近年、子どもたちがどの程度新聞を読んでいるかは不明ですが、情報はインターネットに溢れています。しかし、子どもたちは意外と大人以上に社会を見ているのかもしれない。

普段読んでいる新聞は、最も古いものは1615年の大阪夏の陣を報じたもので、当時は「瓦版（かわらばん）」といって1枚の紙だったそうです。現在の新聞は全国紙・地方紙とありますが、全国ニュースや地域の情報、スポーツ、経済などを知ることができ、情報の一つとして役立っています。

この新聞を読んで、第13回小中学生新聞感想文コンクール

において文部科学大臣賞を受賞した駿台甲府小学校5年萩原結花さんの作品の一部を掲載します。



私から「手」をつなごう

萩原 結花

「ヘイトスピーチ」を私に教えてくれたのは母と新聞だ。母は、「ヘイトデモ中止」の記事を見つけ私に読んでくれた。はじめは、「差別なんてくだらない事は絶対だめだ。ひどい」という腹立たしい気持ちでいっぱいだったが、何度も読むにつれて、「どうしてヘイトスピーチ対策法を施行しなければ、ヘイト活動を止められないのかな」と気になり、「ヘイトスピーチについて、くわしくしらべてみよう」と憤りは興味へと変わっていった。

まず分かったのは、日本の「ヘイトスピーチ」の多くは、在日する朝鮮半島にルーツのある人に向けたものだということだ。

そこには、歴史的背景が見えてくる。調べていくうちに、「反日感情」という言葉が浮かび上がる。それは、昔日本が戦争をしていた時代にさかのぼる。第二次世界大戦の前までは、日本はずっと戦争に勝ち続けていた。その流れにより、日本は朝鮮半島を統治していて、その頃、半島の人々にとって残酷で悲しい出来事があつたという。それは現在でも、当時の感情から和解するのは非常に難しいのだ。だからこそ私は、ヘイト行為よりも歴史を理解する必要があると考える。

さらに私は、在日の朝鮮半島出身の人は、実際にどう思っているのか知りたくなった。そこで、父の知人のキムさんに話を聞いてみた。キムさんは、日本が大好きな人だ。「日本の一番良いところは」ときくと、「有りすぎて、どれが一番か選べない」と答えた程だ。そして、「ヘイトスピーチ」のような差別的発言をされたことがあるか、という質問には、「全くない。逆に、周りの人はすごくやさしい」と答えた。話を聞く前は、在日の朝鮮半島出身の人は皆、辛い思いをしていると思っていたので、少し拍子抜けしたが、その反面、ほっとする思いもあつた。

日本と朝鮮半島の関係はとても複雑だ。そして、政治的に協力し合っているか、というたびみようである。キムさんは、「近くて遠い国同士」だといった。それは、場所に近いが心は少し遠い、ということを表している。私はいつか、「近くて近い国同士」になりたいと思う。温かな気持ちを保持つて。

水や海に関する創作文「ぎぶん賞」の応募

作品9060点から文部科学大臣賞を受賞した駿中2年の田中真愛さんの作品を掲載します。



海と生きるということとは・・・

田中 真愛

立秋間近のある朝、既に空気が生温く日差しもまぶしい縁側に、父が玉の汗をかき腰掛けていた。その先で、青色のビニールプールに由美子叔母さんがホースから水を溜めていた。

（父さんあれを膨らませたんだ・・・）

五歳の和也がたまたま両腕を突っ込んだ。多分太陽光で水温が上がるまでプールはおあずけだ。朝食の後、和也が

「もう入れる？」

「ねえ、もう入っていい？」と数分刻みに大人たちに聞いては、

「まだまだ」との返事にがっかりしたり、ほつぺを膨らませたり、どんな表情も本心に可愛いこの家のアイドルだ。

叔母さんがここで暮らすようになって、そろそろ五年になる。

和也が八ヶ月の赤ちゃんの頃からなので、私にとっては九歳年の離れた弟のような存在だ。和也も「ねえね」と慕ってくれるのが何より嬉しい。

和也が生まれたのは、二〇一一年の一月一日、叔父と叔母がこの上ない喜びをもって和也を家族に迎えた人生最良の日。

そのちょうど二ヵ月後の三月一日、岩手で漁師をしていた和也の父はその日から帰って来ない。叔母たちは近所の人に促され避難して命は助かったが、家は津波に流され何もかも失ってしまった。

乳児を抱えての困難な避難生活にも、叔母は夫の帰りを待ち望んで必死に耐えていたが、兄である私の父の説得で故郷の甲府に一時帰って来たのである。この五年は叔母にとっておそらく何も進んでいないだろうし、何も終わっていないと思う。

叔母の心だけがあの日に残り残されている。只一つ、叔母は父を知らない息子に父の記憶を残すことを心の支えにしているように察せられた。

写真やビデオも津波に流され、和也に見せられる父の手掛かりが本当に乏しい中、叔母は絶えず和也に語り伝えようと努めている。

「和也のことが大好きなパパはね、みんなから慕われた町一番の漁師さんでね、お魚たくさん獲って来て、そしてね・・・」

聞いている和也も父親の愛情を本当に感じ取っているかのような表情を見せることもある。そしてたくましいパパのことを和也は心から慕っているのだ。

今日の日差しはじりじりと暑く、プールの水も予想より早く適温となりキラキラと揺らめいている。きやつきやと奇声を上げて喜んでいる和也の満面の笑みがたまらない。

そして、魚のおもちゃを釣り上げる漁師ごっこを始めると、

「ねえねえ、おさかなたくさんとってあげますよ。どのおさかながいいですかあ」と聞いてきたので、

「漁師さん、お昼のおかずには鰯と鮪を獲って来てくださあい」と頼んだ。大きくなった僕のお船にねえねを乗せてあげるよなんて和也は私に言うてくれているから、ふっと、揺らめく水面が海と重なり、海で獲った新鮮な魚を馳走してくれる和也の姿が思い浮かんだ。気付くと隣の家から魚を焼く香ばしい匂いがしている。

「由美子叔母さん、うちもお魚食べたいね」と声をかけると、どことなく寂しそうな笑顔を見せて

「そうね」と言った。